

エッセイ二題

仄かな未練

根来 滯子

マスコミの世界では、「差別用語」に神経質になって久しい。放送禁止用語というのものもあるようだ。人を傷つける言葉として、使わないようにと決められたようだが、大戦前の文学作品には多用されていたのだから、戦後、人権問題に配慮することが多くなり、禁止語と なったのである。坂口安吾の『白痴』や葉山嘉樹の『淫売婦』など、そのものずばりの名作もある。明確な基準があるのだろうか。差別とは言えないと思うが どういうわけか一般に「屋」がつくものが言い換えられている。「魚屋」「肉屋」「八百屋」「本屋」「床屋」など。それぞれ「鮮魚店」「精肉店」「青果店」「書店」「理髪店」と呼ばれている。「百姓」は「農民」「乞食」は「ホームレス」、「按摩」は「マッサージ師」などと、 どうしてそれが差別語になるのかと思うものもある。

しかし私にも不愉快語というものがある。言い換えてほしいと思う表現がある。

それは「老婆」である。不思議に今でも平気で使用する人がいる。「老婦人」と言つてほしいが、「婦」という字も現在使用しないのであれば、せめて「老女」にしてほしい。人それぞれの立ち位置でやはり差別用語と思われる言葉は控えるべきなのだろう。

「老女」といわれても、文句の言いようがない年代になつて、気のふさぐことの多い昨今である。せめてデパートを回つてスイーツなどを買ひ、憂さを紛らわせようと思ひ立ち、乱雑に口紅を塗り（口紅を塗ればお化粧をしたことになる）、古ぼけたセーターの上に茶色のコートを羽織つて外に出た。

11月の風は寒く、外出に好適とはいいがたい。葉を散らした木々がひっそりと揺れている。最寄りの私鉄の駅まで15、6分、以前は全く気にならない距離だったが、今や重い体重をやつと運んでいるような歩き方だ。同年配と思しき人にも追い越される。目ごろの怠惰な生活ぶりが歩き方にもじみ出ているのだから。

我が家から駅に至る道筋に「生花店」「花屋」のほ うが馴染みぶかいが）がなんと3軒もある。花が好きかといえがばもちろんイエスである。しかし、我が家のかなり広い庭には花など全くない。雑草を、いちい

ち手で草ぬきする程度の広さではないので、業者をお願いして一気に円盤形の機械で刈るのだが、その時に、邪魔にならず、刈りいいように何も植えていないのだ。一時、アメリカの絵本作家、ターシャ・チューダーが住む田舎の丹精こめた庭が写真集になり、テレビで放映され、話題になった。その優雅さに打たれ、私も見習おうと奮起したことがあるが、花作りの面倒さに辟易して早々にやめてしまった。興味が無いのではなく無精なのだ。他人任せの庭になっている。だからせめて生花店の前で花を愛でるのだ。特に急ぐ用事も無い。

3軒の生花店はそれぞれオーナーのセンスで店のインテリアも多様である。豪華な切花を店内いっぱい広げているところ、寄せ植えの鉢に力を入れているところなど、個性豊かで雰囲気の違いはあるようだ。私はその中の一軒、駅に近い店のまえでしばらく佇んで眺めていた。「多肉植物」と言われ、沙漠でも育つというこじんまりした外来のかわいらしい鉢植えである。高齢であるために犬や猫など、ペットを飼うことができない私はせめて、水やりも簡単だという多肉を窓辺に飾って癒しにしてみようと思いい、かなり長いこと立ち止まっていた。



「何を見ているの、ずいぶん熱心だなあ」頭の上のほうで声がする。私に語り掛けているのだろうか。のろのろと振り向いた。のっぽの男が立っている。ほかに人はいない。

「多肉植物がとても可愛いから、買おうかなーと思つて」

「それならもつと奥のほうにも置いてあるんじゃないの」
のっぽの男性は顎で店の奥を指した。白髪がかなり多いからそれなりの年齢であろう。黒のセーターにジー

ンズのジャケット、サンダル履き、この近辺の住人と思える。店員は見当たらない。あまり売れないので何処かでくつろいでいるのだろう。のんきなものだ。

「この店はもう何十年もやっているのだから、もつと気をいれて商売をやればいいのに。全く投げやりなんだから。親の代からの店を引き継いだ息子がしつかりしないからこんな雑然としていて、困ったものだ」
「どうやら男性は懇意にしている店のようだ。人のいない店内をみまわして苦々しい顔をした。

「今すぐ買うわけではないの、これからデパートにくくから、帰りに寄ろうかなとおもって、ただ見ていただけ」

「この辺に住んでいるの？」

「まあね」

「デパートってどこの？」

私は電車で40分かかるデパートの名前を言った。

「そんな遠くまで買い物？」

「まあね」

余計なお世話だと思つてちよつとむつとする。

「駅まで一緒にいこうか」男性は気軽に言った。

「あなたはどこまで？」

「俺は駅前のコーヒースョップでコーヒを飲もうと

思つて。何しろ女房の顔を見ているのに飽き飽きしたから、気分転換するわけ」

わたし達は並んで歩いて行つた。

「よかつたら一緒にコーヒを飲まない？」と彼。

「そうねえ、でもあの店はコーヒがおいしくないから」

「おいしい店もあるよ、駅の反対側の〇〇など、ちやんと一人前ずつ、ドリップで入れてくれるよ、そこにしようか」

男性はせき込んで言つた。私にその気があると思つたらしい。今知り合つたばかりの人であるが、丸顔に細い目が優しそである。この土地の男性だ。怪しい人ではなさそうだ。彼は駅に続く商店の一軒一軒をよく知つていて、内情をおもしろ可笑しく解説してくれた。

もう10年も前のこと、これから行くデパートのある街で、やはり見知らぬ男性に声をかけられ、一緒にお茶を飲んだことがある。カウンターにサイホンがずらりと並び、クラシック音楽が流れ、今時こんなにレトロな店があつたのかと驚くような、本格的な喫茶店に連れていってくれて一時間ほどおしゃべりをしたと

思う。彼は定年になつて有り余る時間を図書館で過ごしているのだといった。久美堂の紙袋を抱えていたので本好きなのかと思ひ私を誘つたのだという。買つてきたばかりの本の作家について話しあつたが、なかなかの見識があつた。知的な雰囲気があつた。しかし妻に疎まれ、家庭に居場所のない退職した男性が、街を徘徊して行きずりの女性に声をかけ、つかの間、寂しさを紛らわせようとしているのは危険である。肩書を失つた男性には名刺がない。住所も名前も告げないままに私たちはそれぞれ異なる電車にのつて別れた。「せめて電話番号を」といわれたが、答えなかつた。こんな出会いで友人關係が成り立つとも思えなかつたし、他に面倒な問題を抱えていたので新しい付き合いを増やすことはできなかつた。

私は都心から私鉄で一時間余りの、山に囲まれた小さな市に住んでいるが、地元の人にとつてはいつまでも「よそもの」である。「老人会」など、高齢者の集まりがあつてもあまり参加したことがないし、隣組の一員であるだけで、地域との付き合いはほとんどない。いづれは「老人ホーム」と呼ばれるところの住人になるであろうという漠然とした計画はあるがまだ具体性

はない。たまにはこのような地元のおじさんとおしゃべりをするのもいいのではと思つた。

「わざわざ線路の向こう側までいくのも面倒だから駅のそばのコーヒーショップでいいわ、ほんの少しの間ね、帰りが遅くなると困るから」

わたし達はさつと開いた自動ドアを通過して、雑然とした店内に入つていった。ほぼ満席である。やつと奥の狭い席をみつめて腰かけ、コーヒーを飲む。やはりこのコーヒーはおいしくない。そのうえムードなどあつたものではない。小中学校で使っているような小さな木の椅子に座つて肩をすぼめている有様だ。

無口になつた私をかばうように「店を変えようか」という。そして顔を近づけ驚くようなことを小声でさやいた。

「ホテルへ行こうか」

「え、ホテル、何しに？」

純朴な童顔が、のつぺりと好色な顔に変貌した。

「もっとお互い親密になるためだよ」

「ホテルって、ラブホテルのこと？」

「行ったことあるでしょ」

「ないこともないけど」

天井に無数の星がさざめき、鏡が四方に張り巡らせ

であるピンクの部屋でくりひろげられた情景が、はるか過去の記憶の中から突然浮かび上がってきた。

「そんなサンダル履きで、行けないでしょ。第一歩きじゃ無理よ」

「馬鹿に詳しいんだね。そりや車でいけばいろいろ面白いところがあるけど、あんたがこれから行くところにいる街のステーションホテルだつていいんだよ」

「私をいくつだと思っているの」

細い眼をますます細くして彼は私を見つめた。私は髪を黒く染めてある。

「年なんて関係ないよ、女は死ぬまで現役だというから」

私は会話の成り行きに目を見張る思いだった。まさかこんな話題になるとは。地元の人のよさそうなおじさん（おじいさんというべきか）がそのような思いでコーヒーを飲んでいるとは、思ってもいなかった。

「それはありがたいけど、やはり無理ね。いくら何でも、今知りあったばかりで名前も知らないのに」

「名前も年もどうでもいいんだよ。要するに男と女であれば」

なるほど、虚飾をはぎ取った究極の実態である。

「若い人が大勢いるでしょうに」

「俺も結構年だからさ、若いのは面倒なんだよ、俺はついこの間、〇〇市のショッピングモールを歩いていたら女に声をかけられたんだ。お茶を飲み、世間話をしたあとに、女のほうからホテルに誘ってきた、お小遣いがほしいんだって。50ぐらいのちよつといい女だったけれど、やはりこういうのは男の俺のほうから誘わないと気分が出ないよね。どう？ 楽しい時間が過ごせるとおもうよ」

——そういえば長いこと抱かれていないなあ、もう忘れてしまうほど。そんな世界はとつくにあきらめていた、でもわたしだつて女なのだ——。

「それにしてもそのサンダルはまずいわね。一緒に電車に乗れないわ。」

庭履きのようなうす汚れたつま先が少し破れている。

「履き替えてくるよ、おれの家は近いから、ほんの10分ぐらいで戻れる、それまで待てるね」

「いいよ、行つてきて」

「きつとだよ、きつと待っていてよ、ドーナツツでも食べていてね。すぐ来るから」彼はくどくどと念押しをしてジャケットを引つ掛け、せかせかと外へ飛び出した。

走り去っていく男性の後姿を窓越しに眺めながら、

なんとなく微笑ましい気持ちになった。やはり彼は正直な良い人に違いない。

改めて店内を見回した。さつきよりは空いている。昼下がりのひと時、おばさんたちのにぎやかな会話、中学生らしき一団。私は時計をみた。買い物に出かけるには十分な時間がある。2杯目のコーヒーを飲み干して立ち上がった。

老婆か否かの線引きはどこでするのだろう。年齢だけでは無いというあいまいさに気付き、背筋を伸ばした。誇らかな気分で茶色のコートに、花柄のバッグを肩にかけ、店をでて駅に向かった。

仄かな未練を残して。

(2019年 2月)

「書く」

根来 滯子

「あなたの書いたものには血が流れていない」と、私のエッセイを読んだ友人が感想を述べてくれた。また「何を書いても通り一遍で、無難なだけで迫力がない、本当に読者の心の底に届くようなことを書くべきだ」という尤もな意見であった。

血のにじむような思いで、血を流すような作品を書く——作者が渾身の力を込めて書いた赤裸々な魂の表現。世界の名作と呼ばれる小説の多くはまさにそのようなものであろう。日本の自然主義の小説ももちろん内面の深層をこれでもかと血に染まり、地をのたうち回っているような告白体の小説、日本の私小説の原型でもあり、ある時期の文学史の主流でもあった。

もちろん、ありのままと言っても名作は作者の美意識と品性によってフィルターがかけられ、普遍性を持つものでなければならぬだろう。その作品は血を流し、且つ、血が通っているのである。現代の若い作家の作品を熱心に読んでいくわけではないので一概に言

えないが、今や「血を流す」といわれる分野の小説を
目指している作家が多いとは思えない。しゃれていて、
知的で、なおかつスマートで、エスプリにとみ、発想
が豊かだというのが目につく。己の魂を苛むような小
説などダサいのである。純文学か、通俗文学かという
境界があいまいになった現代、ストーリーの奇抜さを
重視され、しかも読者の深奥に響く芸術性、思想性も
重要視され、テーマは多角的になり、明治、大正、昭
和のように文壇における〇〇派といったグループ分け
はなくなつて、またそんな会派が無意味でもあるのが
現代の作家たちの個性的な立ち位置だとおもうのだ。
後世になつて、平成の文学を評論家はどのように位置
づけるのか、興味のあるところである。

一般の社会人を対象にしている厚木塾で「日本近
現代文学史」という、二葉亭四迷から始まる日本の文
学史の講座を受け、それぞれの時代の作家の代表作を
読み、今なお読み続けている。最近読んだ昭和初期の
作品、尾崎一雄のエッセイ風の短編、「虫のいろいろ」
を読み、その着眼点の新鮮さに興味をひかれた。病弱
な作者が、寝床のなかで、室内にうごめく様々な虫を
実に細かく観察し、ユーモアを交えてその生態を書い
ているのだが、テーマは狭い一部屋の中の、日常の細

部にもあるということを知らされた一編であった。文
学史に残る小説は長編、短編を問わず多様であり、小
品であってもそれなりに読者に感銘を与えるものもあ
るということである。

何年ぐらい前になるだろうか、高齢者の間で自分史
を書くことが流行になったことがあった。いや、今で
も新聞や月刊誌の広告などで「あなたの自分史の出版
のお手伝いをします」という記事を目にする。おそら
く出版社が高齢者の生きがいの一つとして推奨してい
るのだろう。また不況な出版界の活路でもあるのだろ
う。「自分史を書く講座」というのもあつて自分の一代
記を書くことがささやかなブームとなっている。

私は、14、5年ほど前に厚木市の「エッセイを書
くための教室」に参加したことがあつたが、メーメンテ
ーマはやはり「自分史を書く」であつた。「誰でも生涯
に一作は書ける」という自分史、経験したことをあり
のままに書くのだから書きやすいという。しかし「自
分の歴史」とはいつても、他人に読んでもらうには、
個人的な経験の羅列だけでは、自己満足に終わってし
まって意味がないのだ。著名人の書いたエッセイなら
私生活の一端を覗き見るという読者の野次馬的な興味
をひくかもしれない。市井のひとりではない平凡な

個人が、よほどインパクトのある体験でない限り、自分の生い立ちを書いたところで、身近の友人知人を除いて第三者的には無意味であろう。

私の知人男性が定年退職をして自分史を書いた。学歴から始まって会社での地位、いかに部下を引き連れて出世したか、山あり、また山ありの輝かしい人生を描いたのだが、家族をはじめ、周りの友人、知人は「ただ単なる自慢話だ」と一笑に付したという事実もある。さりとして、「お涙頂戴」の苦労話もいまさら共感を呼ばない。見得と謙遜のバランスをいかにほどよいものにするか、難しい問題だと思う。

非常に特殊な体験、例えば戦災、自然災害の体験、終戦後に外地から引き揚げてきた人たちの悲惨な記録はその時代を知る証として読む人たちの注目を浴びるし、大いに書いて後世に訴えるべきである。もちろん、自分の負の記憶や情報を赤裸々に描いてシリアスな話題を世に問う場合はそれなりの覚悟も必要だし、ただ素直に書けばいいというものでもないだろう。読者が読むに耐えうるような「時代」と「社会性」を持った普遍的なテーマがあつてのことだと思う。

とは言っても、それほど大げさに構えなくても、あの意味、すべての個人はそれぞれ異なった人生を持つ

ているのだから、自分なりの観点で、生きてきた証として自分史を書くことは自分や子供たちへのささやかな記録としての価値があるのかもしれないとも思う。それは人生の終末期をむかえた高齢者の目指すべき生きがいの分野の一つであると肯定するべきだと思う。

私の場合、書くことに血や涙を流すのは嫌いだ。 「書いたもの」はどんなに幻想的、且つSF的なものでも「書くイコール経験」がその基本にあると思うので、どんな作品でも「経験」からのがれることはできないが、時系列的に「自分史」を書くことは嫌いである。知人の書いた自分史を読んだ感想だが、やはり都合の悪いこと、触れたくないことは書いていない。書かれていないところに真実があると思われるような場合でもそうなのだ。結局自分史は、いつ生まれ、両親や家族が云々というノンフィクションの部分を除いて、本人が気づいている、いないにかかわらず、「書きたいことだけ書く」という一種のフィクションから逃れることはできないと思っている。本人が一生懸命に試みている自己分析でさえ独りよがりの感がある。

私は、言うなれば、人生の大きな問題として真に書くべきであろうことは秘事として墓場まで持つていくと自覚しているし、無難な事、平凡なこと、結局読書

感想文のようなものを書くことが主になっている。それも浅薄だから、評論などとは程遠い。読書で得ている引き出しにテーマは詰まっているから、そこから引っ張り出して感想を書いているのである。しかし、それこそ独りよがりの感想かもしれない。それだけではつまらないとささやく声もある。

私は東北地方のごく平凡な中流家庭に生まれ、一庶民としての代わり映えのしない人生を送ってきた。小学校時代に戦争を経験しているので軍国主義の教育を受けたことは鮮明に覚えているが、戦災も免れたし軍隊に服役した兄たちも無事であった。戦中戦後、食糧難の辛さは覚えているが、当時の人はみなそうであったし、今更私が声を大にして強調することでもない。

結婚に関しての、どたばたは誰にもあること、これは私が墓場まで持つていくべきものであり、「書く」という私のささやかな趣味のために身近な人まで不快にしたり、血や涙を流すのは避けるべきだと思っている。60歳で夫を亡くし、とても素直でいい子の娘二人が病弱であることを除けば専業主婦としての無風の人生であった。(これから終末期に至る道筋は不明であるが)。

では、これからも書き続けようと思う私は読書感想

文のようなものしか書けないのだろうか。前述した「虫のいろいろ」のように狭い世界であっても日常生活の隅々に目を凝らして、そこに喜怒哀楽を託すべきなのだろうか。

70歳で入会した厚木市でのエッセイ教室では、毎月2000字程度の短文を書いて提出し、講師の評をいただくのであったが、講師は文章そのものを添削することは一切なかった。表記の説明や、句読点についてのアドバイスはあったが、いつも「よく書けましたね、これからも頑張ってください」といった励ましの評を短冊状の便箋に三、四行書き添えてくれるだけで、我々高齢者の生徒は「頑張らなくては」と思ったかどうかは不明である。しかし、短文とはいえ月に一度、何かを書くことは、書く習慣のなかったそれまでの日常に比べて何かしらの刺激ではあった。

教室では作品のタイトルは自由であったが、ときどき題を指定されることもあった。入会して数か月たったころ、2000字程度の枠で「書く」という題を与えられたことがある。私は次のような短文を提出した。10年以上も前に書いたもので改めて読み返すと随分気負っていると我ながら苦笑するが、当時、会の先輩だったKさんに勧められ、彼の指導の

もと、書き溜めた自分だけのエッセイ集、『舞う』というタイトルの冊子を作成した。



厚木図書館の新刊書コーナーで

『舞う』は納本した厚木図書館の新刊書コーナーで展示され、今は2階、エッセイの書棚に陳列していただいている。「書く」という作品を『舞う』の冒頭に掲載した。稚拙だし、傲慢ではあるが私の一つの姿勢であると今も思っている。

原文をそのままを引用する。

「書く」

「書く」ということを考えるとき、時折私の頭に浮かぶのは、フランス19世紀の象徴主義詩人、アルチュール・ランボウである。

ランボウは16歳の時、詩集『酔いどれ船』で文壇に登場し、20歳で書いた散文詩『地獄の季節』で文学に決別する。その3、4年間の華々しい活躍の後、文学を捨て、およそ18年間、世界を放浪し、アラビアで一貿易商人として37歳で病死するのである。日本のランボウ研究では、小林英雄の訳詩を私は好きなのだが、堀口大学、金子光晴、中原中也など、様々な訳があつて、ランボウの愛好者は多い。小林英雄はランボウを次のように評する。

「ランボウほど読者を黙殺した作家はいない、彼は選ばれた人のためにすら、いや己のためにすら歌いはしなかった。ただ、歌から逃れるために、沸き上がってくる歌をちぎり、ちぎってはうっちゃった。彼ほどあらゆる詩歌の意匠を凶暴に圧縮した詩人はいない」。

それゆえに詩は合理的な解釈を拒み、非常に難解である。原書はもちろん、訳を読んでも理解に苦しむことが多い。例えば『地獄の季節』の一節に次のような有名な詩句がある。

また見つかった、なにが、永遠が、海と溶け合う
太陽が

独り居の夜も 燃える日も 心にかけてぬお前の
祈念を

永遠のおれの心よ 硬く守れ (小林秀雄訳)

私も青春の一時期、彼の詩に出会ったが、同じ感性
をもてず、ついに理解できなかった。そのことをむし
る私は自分のために喜ぶのだが、私なりに思う。誰し
も青春という精神の暴風のような季節、狂気のような
破壊的発散で、感情の高揚を文学や芸術に発揮するこ
とがある。もちろんランボウの詩がその程度のもので
あるはずはない。しかし彼が20歳そこそこで文学と
決別し、一商人として生涯を閉じたことを思うとき、
書くという才能の不思議、魔力を痛感するのである。
天才少年、少女として名をなしながら、いつときの光
芒ののち、成熟することなく消えてしまった例は多い
ことだろう。その時期に書かれたものの一瞬の美しさ
に感動し、痛ましい思いをするのだ。

私は不特定多数を対象としない。たった一人でも同
じ感性を持った人のために書く。

(2019年3月)



さて現在の私はといえば、才能に恵まれなかったゆ
えのおだやかな晩年がある。ボケ防止などと、不遜
なことを思いながら、せつせとパソコンに向かう。